Osaka University Knowledge Archive

Title	語る主体になる ： 語り合いの活動と対話の経験を書くことについて
Author(s)	ほんま, なほ
Citation	臨床哲学. 2018, 19, p. 95-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68166
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

語る主体になる
——語りあいの活動と対話の経験を書くことについて

ほんま なほ

この場でしか話せないことがある

わたしは語りあいの活動をほそぼそとつづけている。語りあいの活動は、病やエスニシティ、性やジェンダーなど、話題に応じてそれぞれにおこなわれ、参加するひとたちも異なる。わたしがひとつひとつの活動に関わるようになった経緯も年数もさまざまだ。どの活動にも共通しているのは、参加者の顔ぶれは多少変化するものの、定期的に集まっていろんなことを話すという点だ。なにより、「集まって語りあいたい」という参加者の単純な思いこそがこうした活動の原動力であるといえるだろう。なにがそこで語られ、また、なんのために語るのか、ということももちろん大切だが、ミーティングの場それじたいのもつ意味の大きさを無視することができない。つまり、集まること、顔をあわせることが、一般に「自助ミーティング」[1]とよばれる活動に通底する重要な意味をもつことは、こうした語りあいの活動のなかでも確認することができる。

こうした語りあいの活動に参加するひとたちは、異口同音に「この場でしか話せないことがある」という。わたし自身、ひとりの参加者として同じことを感じている。たとえば、病や障害をもつ、あるいは、他のひとには話しづらい経験をもっている、そういったことが「あたりまえ」とみなされていない日々の暮らしのなかでは、そのことを話題にすることも遠慮されるだろうし、たとえ話せたとしても、腫れ物にさわるかのように扱われたり、過度に心配されたり、あるいはほとんど無視されたりと、なんともいいようのない日々を参加者たちが送っていることは容易に想像できる。そして、日々の暮らしのなかで孤立せざるをえないひとたちは、ひとには相談できないゆえに、同じような状況を生きるひとたちとめぐりあう機会も少ないだろう。世間で「あたりまえ」とされていることを共有できないマイナーな状況を生きるひとたちは、孤立するだけでなく、たがいに分かちあうという経験すら奪われているのだ。

理由はなんであれ、分断されて孤立した状況のなかで語ることを奪われたひとたちは、じぶんたちのことを語るための〈ことば〉そのものも奪われている。たとえば、差別的な響きをもったことばで名指されたり、揶揄されたりしたことのあるひとたち、あるいは、「女」「外国人」という名称のように、それを口にする者にとってはなんの差別的なニュアンスがなかったとしても、ある状況でそのことばゆえに他のひとたちから印づけられるひとたちは、その印による選別を拒絶するにせよ受け入れるにせよ、他人から与えられたことばに対して反応し、それを繰り返すことでネガティヴなアイデンティティを形成せざるをえないだろう。例をあげるまでもなく、じぶんの望まないことばでじぶんのことを語ることは屈辱的である。そのことばが、それについて語ること自体が痛ましい経験をよびおこすこともあるだろう。あるいは、病や障害をもつことでなんとも名状しがたい痛みや不便さを経験する場合、その経験を表現するのに適切なことばそのものを見つけることは容易ではないかもしれない。医療などのサポートを受けられる場合、病名や症状などの情報を外から得てはじめてじぶんの経験に輪郭が与えられることもある。そうした情報のおかげで理解が進んだり、適切な援助が受けられるようになったりする反面、鏡に映し出されたじぶんの姿しかみることのできないように、身体の中心をずらされたような外在的なことばによってしかじぶんを語れないという不自由さもまたそこにつきまとう。さらには、社会のなかで用意されているカテゴリーにはうまくじぶんの経験があてはまらず、そのカテゴリーを前提にしてつくられているさまざまな制度やコミュニティのなかで、いつも居心地のわるさを感じているひとたちもいる。

言語が使用できることと、じぶんたちの存在や経験をことばによって適切に表現できることとは異なる。存在や経験をことばによって適切に表現できないのは、たんに使用可能な語彙が不足しているからではない。存在や経験にことばによって関係するしかたがうまく見つけられないのだ。ことばは何かを指示し、名状するだけでなく、何かに関係するしかたを与える。ことばがない、あるいは、ことばが充てがわれたとしてもそれはじぶんのことばではないという状況をひとが生きざるをえないとき、そこでは〈ことば〉と〈主体〉との関係が損なわれているといえるのではないだろうか。本稿では、この〈ことば〉と〈主体〉の関係について考えてみたい。

対話する、ということ

さきに述べた通り、語りあいの活動では、その場でしか話せないことを語りあうだけでなく、そのような定期的な集まり（ミーティング）がもたれて、そこに各人のペースで参加し続けることが大きな意味をもっている。こんにち、対話という語はさまざまな意味で使われているが、ここでは語りあいのようなミーティングの場で対話というものがどのように経験されているのかに焦点をあて、その意味をいくつかの点から考えてみたい。

さきに示した語りあいの活動では、なによりもまず〈出会う〉こと、つまり、その活動や場に出会うことと、その場でひとに出会うことが最初に大きな意味をもつ。わたしの関わっている語りあいの多くの参加者が、じぶんがこの場に来てよいのか、じぶんがその場所にいてよいのか、と思い悩み、最初の参加までに大きなハードルを感じたという。語りあいの場に参加し、語るという以前に、参加してよい、参加したい、参加しようと思えるまでのプロセスも重要である。情報提供の有無やその活動や場のつくりかたが参加しやすいか否かにかかわらず、参加する当人にとって場やひととの出会いに対して十分な準備ができているかどうかが、その場での出会いを生じさせる鍵を握っている。つまり、その場にやってきてことばが交わせるようになるまでの参加者の逡巡もまた、対話が生まれるための重要な要素となっている。さらにまた、その場に来てはみたものの、まだ話せないというひとたちもいる。参加するといっても、その参加のしかた、その場での存在のしかたは一通りではなく、ただそこにいるだけ、話を聴くだけというポジションも用意されていなければ、安心して話をはじめるための心の準備もできないだろう。ここでの対話とは、話されたことや会話のやりとりだけでなく、その場に来る、そこにいる、聴くということばを発するまでに必要なプロセスを前提にして成り立つものであり、参加して話すにいたるまでの沈黙の期間は、語ることの裏表として、対話にとって不可欠な構成要素として考える必要があるだろう。つまり、語りあいがなされている時間と空間で生じていることだけが対話なのではなく、その外で生じていることとの関係、参加する前、参加した後の生活との関係もまた対話の一部なのだ。

話さなくてもそこにいていい、ということが保証された場所で、そこに集まっ

たひとたちの語りにいあわせ、一通りではない多様な語りに耳を傾けていると、やがてここでじぶんも話してよいのだと思えてくる。その場所以外では口にされずまた耳にすることのなかったことばたちに出会うことで、それまでは語ろうとしても輪郭のなかった経験をめぐって、他者のことばによってようやく輪郭らしき線が浮かびあがり、こんどはその輪郭をじぶんではっきりと描きたいと思うようになったとき、そのひとはみずからことばを選んで語りはじめる。だれひとりとしてまったく同じ経験はないけれど、経験を構成しているいくつものことばのピースのなかで、じぶんの経験にも符合するピースをみつけることができれば、残りの足りないピースをじぶんで足しあわせることで経験の全体像をつかむことができる。このピースとなるのが他者のことばであり、他者のことばを借りてじぶんの経験や思いを語り直そうとしたとき、そのひとはその場所以外では奪われたままであったことばを取り戻し、疎外された生をことばによってじぶんのものとして生き直すことができる。じぶんたちの体験をじぶんたちのことばで語ることは、〈ことばを探す〉ことであると同時に〈ことばで探す〉ことと等しい。それは明確に定義された語彙や用法にしたがって言語を操るのと異なり、ことばで語ることを通して〈ことばの主体〉になること、つまり〈語る主体〉になることだ。

このような場で語ることは、意見交換や議論のように話題や議題について発言を通して貢献するのとは違い、その場でのことばそのものの意味の役割も大きく異なっている。そこでのことばは、伝達や描写のために話されるのではなく、つまり、手段として使われるのではなく、まさしく話すために話し、語るために語るという行いなのだ。このような対話において、話すひとと聴くひとは ことばの背後にさかのぼることなく、その場に湧き出てくることばをそのまま信頼し、そのことばがあらわにする生をみつめる。ことばを聴くことは、何かを理解するその手前で、そのことばを通して相手の生、そしてじぶんの生をもみつめ直すことを要求する。そこには、ことばと探究の本質的なつながりがある。なにが話されているか、ということももちろん重要ではあるが、なによりそのひとの生に関するなにかが語られることで、語るそのひとの生がまさに目の前に立ち現れてくるさまを聴く人は目の当たりにする。それは〈生を吟味し探究する〉姿だといえよう。ひとはそのような語る主体に対面するとき、ことばと主体のそのよ

うな関係を学び直し、じっさいに声にするかしないかは別として、そのようなことばで語りたいということを強く動機づけられるのではないだろうか。

このように語りあいにおける対話とは、集まる場とひとたちとの〈出会い〉、ことばとの関係を結びなおして〈語る主体〉になること、そのような語る主体が交互に現れる独自の時空間で〈生を探究する〉、この３つのことがらが重なることであるといえるだろう。本稿の後半でこの３点について、具体的なエピソード記述を通して見直してみたい。

対話について書く、ということ

先に述べたように、対話による探究は生の探究そのものであり、他者を知り、自己を知る知の実践である。そのような知は語るひとの生から切り離されて抽象化されえない〈語ること〉と〈聴くこと〉のなかでしか成り立たない。その場で語る者と聴く者のあいだでしか成り立たない、はかなくもみえる〈知〉の意味は大きいとわたしは考える。

わたしたちの身の回りにはあまりの多くの情報が渦巻いているように見えて、それらがわたしたちの生身と関係を結び、わたしたちの知となることは稀ではないだろうか。ここでいう〈知〉とは、明確に定義され、流布し、わたしたちに対して外から被される情報のことではなく、わたしたちがどこにいて何者であるかを知るためのものである。身近になかまを見つけられないマイナーな状況を生きるひとであれば、なおさらその意味での知に触れる機会は少ないだろう。たとえば、病気や症状についての知識はわたしたちの身体を外側から理解する助けになり、その状態の改善のために一定の効果をもたらすかもしれない。しかしその病気をもって生きることの意味については、そうした知識はなにも教えてくれないのではないだろうか。病気や症状についての知識と、その病気や症状を経験するうえでひとが知ることとは異なる。それは当の病気や症状についていちばん知識をもっているかどうかということではなく、あるひとが生きるなかでその病気や症状をもつことの意味をそのひと自身が探ることができ、それを表現することができる、そのことが〈知る〉ということを成り立たせているということだ。そもそも、知るということには、〈誰が知るのか〉という主体のポ

ジションが不可欠ではないだろうか。にもかかわらず、わたしたちの身の回りにあふれる知識は対象化され、誰のものかという主体から切り離され、他のものと並べられ、どれが正確であるか、どれが優れているか、どれが力をもつのかについて云々されることが多い。

語りあい、対話の場に集まったひとたちはじぶんたちに起きていることを話し、その意味を探究し、表現する。対話の場にいあわせるからこそ、こうした生の探究をともに行うことの意義を十分に味わうことができる。それがひとが対話に参加する理由であることは間違いないだろう。しかし、なおその生の探究を、その場限りで消え去ってしまうのとせず、その場にはいないひとを巻き込むものへと展開させる可能性はあるのだろうか。たしかに話されたことは録音をすることもできるし、それを文字に書きおこすこともできる。そうした記録化された語りを読むことで得られる気づきもあるだろう。しかし、会話録には語るという経験も、それを聴くという経験が残されない。

じっさい、語りの記録にはさまざまな種類がある。たとえば、あるテーマについて話しあわれる様子を音声記録に残すなどを通して対談録を作成することはできるだろう。その場合、記録する者が話されたことを「読み物」へと再構成し、編集するという作業が必要となる。話された場面では省略されたり、その場にいないとわからない情報を補足したり、参加しているひとたちの笑い声や話し方も含めて、読み手にもわかるような工夫や加工、切り取りや強調などもなされるだろう。多くの対談録は、その場で話されたことばをそのまま再現することよりむしろ、発言者が言いたかったことを書き加えたり、より適切な表現に書き換えたりして作成される。こうした対談録は記録をもとにあたらしく読み物を書くという目的をもっており、話すことはそれを文字にするための手段になっている。

また、社会調査や質的研究の手法として用いられるインタビュー（聞き取り）調査は、これとは別種の目的をもっている。たしかに、調査を前提に集まるひとの同意を得て、なんらかのテーマについてグループで話しあうという調査手法を用いて、話された内容を記録するということもできる。ただし、インタビュー調査には調査の目的がかならず設定され、何を明らかにし、何を知るのかを決定するのは話し手ではなく調査者である。調査者は何かを明らかにする意図のも

とで、ひとびとの語りのなかに「第三者」、つまり、その場にいようといまいと、語られる状況から離れた関心をもつ者の視点を導入し、語られたことに「解釈」や「分析」を加える。つまり、インタビュー調査にとっては、語られたことは、「解釈」や「分析」という加工が必要な「生データ」、「素材」であり、語り手や聴き手がその場で語りながら、あるいは、聴きながら感じていることは二次的なもの、あるいは、調査の対象外となる。

さきにみたように、対話とは交互に語りをつむぎながら、各人が各人の生を吟味していく営みだ。対話による探究は、たしかに何かを知り、明らかにするプロセスだが、それはひとの生の探究そのものと区別できない。つまり、それは語るひとの生から切り離されえない、語るという実践のうえにしかなりたたない。そうした生の探究は対象化するという手続きそのものと相容れない。語りあいのなかでの語るひとと聴くひととの関係、語るひとと語るひととの関係を書くことははたしてできるのだろうか。

以下では、対談記録やインタビュー記録とは別のしかたで、語りあうという経験について書くために、「エピソード記述」を応用することを試みる。エピソード記述とは、他者と交流するなかで印象深く記憶されている経験、主体と主体とが交流する経験を「背景」「エピソード」「考察」の３つのパートに分けて記述する方法である[2]。語りあいの経験について書くにあたってエピソード記述は次のような点で有用だと考えられる。まず、エピソード記述は経験の記述であって記録ではないこと。記述される内容は第三者的な観察によるものではなく、他者との交流によって生じた経験であり、その経験のなかに何かが浮かび上がるさまを描くのが目的であること。そして、その場で起きたこと、語られたことのすべてを記録するのではなく、書き手に生じた経験の変容をことばで描くことにより、語りあいの場で生きられた経験の意味をさらに後から探究し直し、他の経験とつなぎあわせることができること。ひとの経験は、客観的に記録されるデータとは異なり、ひとつのことが他のさまざまな出来事と重なり、たがいに参照しあい、濃淡や起伏をもって重層的に描かれるものである。そして記述される経験の意味は、さまざまな読み手を通してさらに探究されることに開かれている。以下で示すエピソードは、筆者自身が語りあい活動に参加した経験をもとに、とくに印象深く記憶されていることがらを書いたものである。

エピソード「どうしても語りたいという思いが抑えられなくなった」

〈背景〉

「多様な性と生を考える学習活動３丁目」は、名桜大学の有志の学生と教職員のメンバーによって営まれている「フクロウの会」を母胎に、多様な性について語りあう集まりであり、このほかにも、ひとには語りにくいさまざまな悩みを話すことのできる「語れない想いのBar」なども定期的に開かれている。そもそもわたしが「３丁目」にはじめて参加することになったのは偶然によるものだった。わたしはじぶんの属する大学の大学院生のための研修を名桜大学でおこない、引率者としてその集まりに臨席することになっていた。多様な性を生きる当事者がこのBarに参加しているということは、この活動に関わる教員から聞き知らされていたが、どのような集まりで何が話されるかは正確に知らなかった。他方で、わたし自身の個人的背景として、性と性別に関する悩みが積み重なったすえ、何年もの間、ひどく心身の不調を来していて、友人のすすめにより専門的な医療サポートを受けはじめ、担当の医師からも同じ悩みをもつひとたちと交流することが勧められていたのだが、じぶんから積極的に動きだすにはいたっていなかった。そのようななか、同じ友人がこの「３丁目」にも関与していたことなど、いくつかの偶然が重なって、わたしはこの語りあいに参加することになったが、多様な性について積極的に語ろうという心構えのないままその場にいるという状況であった。

会では１０数名が集まり、円になって床にすわっている。各自はその場で呼ばれたい名前を紙に書き、見えるように折って前におく。会がはじまり、その日の担当学生からこの集まりの趣旨と、いつきても帰ってもよい、話しても話さなくてもよい、その場で話されたことはそこにおいて帰る、という３つの約束が説明された。

「大学にはいって知ったことは？」という最初の質問に、毛糸でつくられたボールを回しながらひとりひとり答えたあと、やはりボールをパスしあいながら自由に話しあっていく。集まった若い学生たちが主として性別違和に由来するさまざまな思いをしっかりと話すのを聴いてわたしは驚きを隠せなかった。わたしは、性別違和を抱えながらもかなり長い間、誰にも話すことなく、参加当時

もごく限られた友人にしかそのことを打ち明けていなかった。このエピソードは、わたしが参加者の語りを聴きながら「話したい」という思いを抑えきれなくなってボールを受けとり、話しだしたときのことである。

〈エピソード〉

会がはじまってしばらくたって、家族のことが話題にあがった。多様な性・性別を生きるひとたちが家族にじぶんのあるがままの姿を打ち明けるのが容易なことではないことは、わたしもよく知っていた。参加者それぞれがポツリポツリと家族への関係について話しはじめる。何人かが話したあと、わたしの隣に座っていた学生が、女性として生きようとするじぶんを父親が家族の一員として認めてくれず、家のなかでもまるで他人どうしのようにふるまい、長いあいだ父親との確執が続いていたのだが、あることをきっかけにその父親から、女性になりたいという想いを理解するのは難しいけれど、誰がなんと言おうとお前はわたしの娘だと伝えられ、じぶんが父親に理解を求めていたことに気づき、長い確執がとけてうれしかった、と話した。わたしは参加している学生たちの親の世代にあたり、生きてきた時代や状況もかなり異なっているので、じぶんの経験がこの場で語るに値するのかかなり迷いながら話を聴いていた。そして、わたしはわたしの父親への想いを誰にも話したことがなく、そのことはわたしの胸のなかに深くしまいこまれていた。しかし、家族への想いを語る学生たちの声を聴き、さらに先の学生の話に強くつき動かされ、どうしても話したいというきもちが湧きあがってきた。もうわたしはそれを抑えきれなくなった。発言するときにはボールをパスしてもらうことになっていたので、わたしはためらわずに手をあげてボールを受けとり、次のような内容を話しはじめた。

> わたしの父は２年前に亡くなりました。父は大正生まれで、じぶんの性や性別についての悩みを家族に話すということはわたしにとって考えられないことでした。わたしのこと（性的指向や性自認について）は一生話さないと心に決めていたんです。でも、父が臨終を迎えるとき、病院のベッドに横たわり死にゆく父の姿をまえに、わたしは、これで父にとっての「息子」としての役目はおわった、とおもうと同時に、わたしはあなたの娘ですよ、と心

のなかで叫んでいました。わたしはじぶんのことを父に話して聴いてもらうことはなかった…だけど、そうやってお父さんと関係を結べたことは、ほんとうによかったとおもいます。ほんとうによかった…

このことをその場で話したことに、わたし自身非常に驚いた。じぶんの意思とはべつに、口が勝手に動いて話したように感じた。わたしとはまったく異なる状況ではあるけれども、父にはいえなかった想いを新しい世代のひとたちが語っていることは、どこかわたしにとって救いに思えたのかもしれない。この会に参加するまでは、じぶんとちがう時代状況を生きているひとたちと、本当の意味での交流なんかはできないだろうと決めつけていた。だが、こうやって話してみると、家族への想いは同じなのだということがその場で分かちあわれて、わたしは勝手にその場の一員になれたように感じた。年齢とか時代とか、そういったことがすべてわたしの頭からは吹き飛んで、わたしの前に父親とのやりとりを語ったその学生に、ほんとうによかったですね、と心からの想いを告げることができた。

〈考察〉

場に参加するとはどういうことだろうか。語りあいがはじまったときは、わたしはその時間と空間に居合わせてはいるが、じぶんがその場でどのようにいるべきか、ずっと迷っていて、心そこにあらず、という状態だった。わたしは多様な性についての語りあいには参加したことはなかったが、障害やエスニシティ、ジェンダー、病など、それ以外のさまざまな苦労について語りあう場や対話については関わってきた経験があった。しかし、わたしはつねにそのような語りあいの場をどうつくるかという立場で関わってきたため、自身がこの会でしたように、心から話したいと思うことはほとんどなく、とくにこの会での話した内容については、そもそもじぶんが口に出すということは考えられないことだった。「なんでも話せる場」と口では言いながら、わたし自身はぜったいに誰にも話さないこととして完全に凍結していることがあった。それを話せるようになるまでの経緯として、この会に参加する前の半年間ほどで、わたしは信頼のできる友人たちに少しずつじぶんの性別違和などについて話せるようになっていたこともあげられる。それがなければわたしはこの場でなにかを話すことはなかった

かもしれない。それでも、会がはじまるまでのわたしはなにかを話すことにためらいをつよく感じていた。しかしこの「３丁目」で、参加するひとたちがじぶんの直面していることについてまっすぐ語っているさまを目の前にして、わたしはとても心が動かされた。話されている内容がじぶんの経験と同じであるかは、それほど問題ではなかった。状況は異なるにせよ、そのひと自身が生を逃げることなく引き受けている姿がひとりひとりの語りから見事に浮かび上がっていた。わたしは、その語りを前にして、わたしは同じように語りたいと思い、語ることが理解されようが理解されまいが、とにかくその場にほんとうの意味での参加をしたいと強く思ったのだった。

また、じぶんの経験を語るという点についても、信頼できる友人や専門家がわたしの話に真摯に耳を傾けてくれている状況とまったくちがうものでもあった。そのような状況では、わたしはじぶんの経験を話せば話すほど、話せてよかったと思う反面で、孤立感を味わうことが多かった。経験を話すということはじぶんの置かれている事態の惨めさを再確認させられるところもあり、話した反動でよけいにつらくなることも少なくなかった。ところが「３丁目」で話せたあとは、ほかの参加者はいったいどう思って聴いたのだろうか、貴重な時間を使ってわたしが話してもよかったのだろうか、といった不安もあったが、それにまして、その場に参加できたという満足感と、わたしはじぶんがそこにいてよいと心から思える場所みつけたという感慨にひたることができた。自分勝手な思いにすぎないかもしれないが、その場だけでもあれこれ考えることなく、素直にじぶんがじぶん自身でいられる場所が見つけられたと思うと同時に、その場にいつでもいられるわけではなく、去らねばならないというさみしさも感じた。今回はたまたま参加することができたが、じぶんにもこのような場は必要であり、またこの活動に参加したり、別の場所で新しい機会を設けたりするなどして、このような場をじぶんの意思でつくっていかなければならないと思った。そしてわたしは、語りあいの場に参加したい、場をつくりたい、というひとのきもちはこういうものなのだ、とようやく気づくことができた。

語る主体になる

このエピソードでは、わたしは、じぶんの経験を語ることにより〈語る主体〉になり、語ることによって語りあいの場を構成する主体になり、さらに、じぶんの人生の主体にもなることを経験している。ここであらためて考えたいのは、3つの意味での〈主体〉である。まず、まさしくわたししか語ることのできないなにかをひとに語るその語り手としての主体。そして、その語りのなかで語られる人生をその場で語ることを通して生き直している主体。最後に、この二つによって時間と空間をともにする仲間、コミュニティを構成する主体。逆に言えば、この場に参加するまではわたしはこの３つの意味での主体を奪われた状況におかれていたが、わたしは語ることを通して、この主体を取り戻す経験をした、といえるだろう。

一つ目について。わたしは、じぶんの経験がひとに語ってはいけない、語るに値しないと判断し、じぶんは語り手になれないと思い込んでいた。わたしはさまざまな情報を得て他人の経験とじぶんのそれを比較し、じぶんは他のひとほど苦労していないと思ったり、どうせ話してもわかってもらえるはずがないと決めつけたり、そもそもどのように話していいのかどうかまったく見当もつかない状態にあった。わたしは性別違和などの多様な性や性別について、ひとびとがどのようなことを経験し、語っているかはじぶんで調べて知識のうえでは知っていたが、それを知識としてもっていることと、じっさいに目の前の誰かが語ることとはまったくちがっていた。その語りを聴くことで、胸になにかが突き刺さるような、あるいは、そのことばでじぶんがえぐり出されるような心地がした。しかし、それは決して不快な経験ではなく、語りだされることばを導きにじぶん自身の姿をみつめることを促した。目の前にいるひとが率直に語るさまがわたしの胸を打ち、わたしもこのように語り手になりたいという思いを強めたのだろう。わたしは語りを客観的に眺めるポジションをはなれ、なんでもいいから話してみようという語り手に移行することができたのだった。

二つ目については、これも不思議な体験というほかないが、わたしはひとに語るということを通して、過去のことを頭のなかで再現しながら、じっさいには父にはいえなかったわたしの想いを、その場で代わって話しているという錯覚の

ようなものをもった。父にはいえなかったという事実は変わることはないが、そのことを無念に感じていたことをじぶんでもはじめて気づき、その想いを解放することができた。しかしそれは、無念さに打ちひしがれるという体験ではなく、むしろその場で家族への想いを語る仲間と関係することができ、じぶんとは異なるけれども、家族との関係を生きている仲間たちにじぶんを重ね合わせ、じぶんにはできなかったことがこのひとたちにはできていることを素直に喜ぶことができる充足感であった。わたしはじぶんの人生に対しても他人の人生に対しても、それぞれつらいものではあるが、肯定的に向かえることができたと感じたのだった。それまでは、わたしはじぶんの人生を客観的にみつめることはあっても、それに積極的に関与することはなく、人生とじぶん自身とをどこかで切り離していたことに気づかされた。じぶんの人生でありながら、その主体になることなく、どこか遠くから眺めていたわたしが、はじめて自身の人生に降りてきて、語るというしかたでその状況を生き直す、その重要な一歩になったといえる。

最後に３つ目について。推測の域をでないけれども、「３丁目」に参加しているひとたちは、話す内容は異なるにせよ、ある共通する体験を得ているのではないかと思われた。わたしはこの語りあいの場がもつ力を直に感じることができ、語りあいの場に参加する意義を深く理解すると同時に、限られた時間ではあるがその場に参加するひとたちがこのように深く関係しあえることがコミュニティ形成にとって重要であると実感した。義務感や役割ではなく、この場がじぶんたちの場であると思えること、そしてわたしも語ることを通してその一端でも支えたいと思えることが、コミュニティに参与する主体として必要不可欠な点であることを知ることができた。参加したあとで、わたしもこのような場をじぶんでつくりたいと思えたことは、単にじぶんのため、というだけではなかった。ほかにもこのような場を求めているひとたちのために、なにかできることをしたいというきもちが、自然に湧きあがってきた。ほかのひとのための場づくりにはわたしもこれまで数多く従事してきたが、わたしははじめて、コミュニティを求める主体として行動し、それを続けたいという動機をつよくもつことができたのだった。つまり、与える者でも受けるものでもなく、コミュニティを構成する主体になることを体験したのだ。

さきに書いたように、語りあいにおける対話では、集まる場とひとたちとの

〈出会い〉、ことばとの関係を結びなおして〈語る主体〉になること、そのような語る主体が交互に現れる独自の時空間で〈生を探究する〉、この３つが折り重なって生じている。その場に集って〈語る主体〉として存在するひとたちと出会うことにより、わたしは語るという実践に強く誘われ、じっさいに語ることを通して、今度は語る前は思いもよらなかった生の探究をはじめる。

たとえば、家族との関係はひとそれぞれであるが、誰にとってであれ、家族との関係の模索そのものがひとつの生の探究であるといえる。ただし、それは探究とはいっても経験のなかに埋め込まれたままであり、ことばを通してそれが語りだされることで、経験のなかですでにはじまっていた潜在的なかたちの探究があらわになり、その意味も明らかにされる。語りあいの場は、そうした探究のありかたを他者とともに分かちあい、生の意味をともに明らかにする作業の場となる。語るとは、語られる内容を誰かに伝えることだけでなく、語ることで生じる何かを手探りで確認しあい、その何かを聴き手や他の語り手ともに手繰り寄せるとともに、さらにそれを語りあいの外で生きることへとつなげていく行為である。そして、語りあいの場でのことばは、情報伝達の手段ではなく、それを通して語り手たちがたがいに関係しあうその関係そのものである。その〈関係としてのことば〉が語り手としての主体、語られる人生の主体、語りあいの場を構成する主体をひとつに結んでいる。それは、語りあいの場の外では触れられることのきわめて稀な、人間の表現としてのことばだといえよう。

哲学の実践としての書くこと、読むこと

さいごに、エピソード記述と対話について書くことの関係について考えることで、この文章をしめくくりたい。エピソード記述は、ある経験の全体像ではなく、むしろ印象深く記憶され、あるひとの生の一部となる経験の〈断片〉を拾いあげ、経験の特殊性ではなく経験の一般性に向かって意味を探究するのに適している。経験の一般性とは、わたしたちが直接に同じ内容をもつことを意味するのではなく、経験の理解を成り立たせるなんらかの共有された地盤に触れることにより感じられるものだ。つまり、経験の一般性は対象化された事実や客観的条件ではなく、わたしたちがなにかを理解するときにかならず働きだしている

ものだ。こうしたエピソードを書くことは、ひとの経験を一貫性ある「物語」に仕立て上げるのとも異なり、また、物理的な「記録」を作成することでもなく、〈なにか〉がエピソードとして浮かび上がる経験の基盤を書き手と読み手に気づかせる。「物語」でも「データ」でもない、経験についての表現というものが可能なのだ。書き手にとってもまだはっきりとかたちを結ばない〈なにか〉が書くことを通して目の前にあらわれ、ひとつの表現となり、その表現をさらに見つめ直すことで、読み手とともにあらためて意味を探究することが可能になる。「背景、エピソード、考察」を単なる記述の形式としてとらえるのではなく、むしろ、書き手の経験への〈まなざし〉を三通り繰り返し、それを読み手にわかりやすく提示するための手順として考えることがよりふさわしいように思われる。つまり、この記述法は、だれもが経験について書き、表現することを学ぶための最適な道具であるともいえる。

対話、語りあいとは経験であり、しかも、他者を知り、じぶんを知り、その両者の交流を知る経験だ。それゆえに対話について書くためには、対話についての記録を残すのでも、対話を物語に加工するのでもなく、交流の経験をことばであらためて描きだすことが重要となる。うえに述べたエピソード記述、あるいは、「背景、エピソード、考察」という明確な形式がなくともこの３つの視点をふまえて書くことは、こうした対話の経験を描きだすのに適しているのではないだろうか。なにが話されたか、という情報よりも、話すことでなにが経験されたか、そこで探究されるものはなにかを問うことが、書くこと、読むことの中心に位置づけられるのだ。さきのエピソードについても、語りあいの場で語られた内容だけに着目して、「性別違和」をめぐる「特殊」な経験について情報を抽出するのではなく、性別違和をもつという状況を生きるひとたちがことばで生を探究する様子を、同じことを経験するわけではないが、やはり生を探究する者として読むことができれば、読み手それぞれのしかたで探究に参与し、さらに対話を続けることができるだろう。

エピソード記述にかぎらず、書くという実践は、古来、人間が人間について知るために繰り返してきた営みである。書くことは、それじたい人間の生の表現であり、古代の哲学ではこうしたことばの実践が、自己や他者、コミュニティへ関係するための主要な役割を果たしてきた。かつて哲学は、こんにちのようにひと

びとの経験を調査し、それを科学的に探索し、知識の体系をつくるのとは異なり、日々経験されることに即して人間の生をさまざまに表現し、その表現に立ち会い、さらに語ることを通して生を探究してきた。まさしく「エピソード」という体系化され大きな物語の部分となることのない経験の断片を書き、読むことは、詩を書くことに通底する人文学的な実践に通じるのではないだろうか。対話を文字によって再現するのではなく、対話を通して得られる交流の経験をことばであらためて描きだし、そのことばをもとに、読み手とともに生の探究をつづける。こうした書くことの実践は、研究する者とされる者とのあいだに壁をつくることのない、倫理的関係にもとづく探究の道をわたしたちに開いてくれるだろう。

（注記）

当初、ここで示したエピソードが書き手であるわたし自身の個人的経験を不特定多数の読み手に晒すことに戸惑いを感じ、「Aさんのエピソード」として匿名化して掲載することを考えていた。しかし、エピソードの書き手を伏せ、本稿の書き手との関係もあいまいにすることにより、書かれたことばが対象となり、〈語る主体〉というテーマが濁ってしまうばかりか、保護のために隠すという行為が〈語るわたし〉と〈書くわたし〉を裏切ってしまうと感じられたため、迷いに迷ったすえ、わたしのエピソードとして書くことを決意した。それがわたしの経験に対するわたし自身の責任としてふさわしいと思ったからだ。この文章が書くことと倫理の関係を考えるきっかけのひとつとなることを願う。

注

1. 「自助グループ self-help group」、「ピアサポート」など、さまざまな呼び方がなされている。単純に「交流会」として開かれているものも多いが、何らかの困りごとについて、自主的に参加し、定期的に集まって語りあう活動をここでは指すものとする。
2. 鯨岡峻『エピソード記述入門：実践と質的研究のために』東京大学出版会、2005.